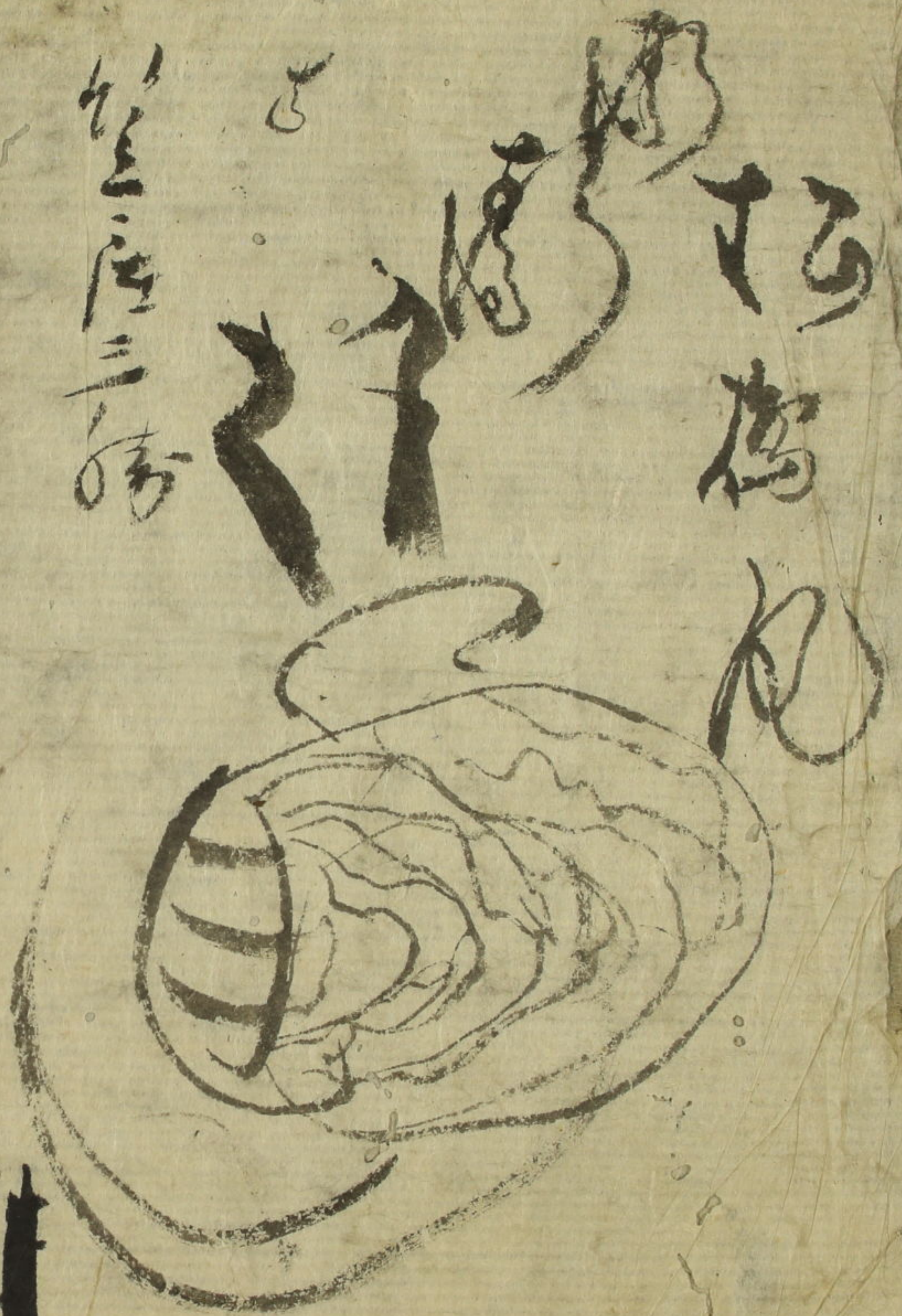




蓑笠雨談自序
 壬戌夏月予遊京畿客於函西諸州
 經履千折之路晨風夕雨祀霧淨星
 重繭數百里不覺緇塵染素衣履
 而東西遊行百又餘日碧水丹山名
 花異植應接不暇山水幽致雅俗碎
 言錄以備邊忘始屆季秋得造門基
 時方輕寒凄然曰以其不筆之筆且
 補破遮寒偶書肆重三郎來訪寒暄

竹石
 竹石
 竹石



已畢談及著述之事。見座間散落字
紙數十頁。取而讀之。曰。王翁之西遊
必有異聞。而今果有此書。詎復說之
為強請梓之。予謂否。顧昔人之著書
。於微拓理無一字空設。準以實見據
。以經史此書固方俗巷談之小事類
。多浮詭。不如闔口而無言。書肆曰。不
然。夫不龜手藥。宋吳各異。其灰用蓋
。士君子者為道刻。而不謀利。書賈者

為利刻。而不慮道雅俗。壞大殊其
趣。又不足尤也。遂豪奪而去。手自搯
。鑽點定。淨書經月餘。而携來乞標。予
不得已。以兩談命之。而彼復噴予。號
以藁笠二字。冠其上。嗚呼。如是書特
一時之灰。華記始無意梓行。豈思遽
。登梨棗。金聖歎嘗以手紙華墨之。四
費批西廂記。予淺陋加之。費個意思。
却招大方之嗤笑。有深愧於心焉。迨

其迄切乎序於予。誅求太急。因叙其顛末以還之。

享和癸亥。立秋後一日。書於武江飯台著作堂。

兼笠隱居題



兼笠雨談初編

○東海道の一修へ世人つひおれたる。山河同小熟一諸
説耳。今さらこの乃まをいりんと。道中記とい
ふものめれたる。されどかゝ熟路ハ多ク。ちかぢか
見おくり。或やもさるるもわらんかとわり。

○この書紀の各ありあがり。踏程の遠近をいそ吟咏
の詩翁をのせむ。只古人に傳記墓誌奇説ホを記す
○圖説證とまきりけり。暮してあをを抄出さる。その
よりごころにたをのハ新に画に推蒙をよるこが
是えより古画のそあめんとあしあつさる。圖説
よまがむて新古を志す。

○ あり考めりしは二編三編に編みあるは、亦人の
 のりよ内をきり記せしむるは、なほ怪しき事あり
 なるべし。

○ 第一巻の相列より江戸まで、の話をあるは、第二巻の
 京師の話をあるは、第三巻の浪花人の傳を述これ
 ごとくめり、次ぎありあり、和のつらき事、二編三編
 この例よりあり、亦紀行あり、さうも、評し、さ
 り、江戸及諸所の考を載、圖録をあり、江戸
 品より、さうが如し。

養笠雨談初編大意終

養笠雨談初編總目錄

卷之一

- 富士の農男并 浅間れ辯
- 駿馬の蹄趾并 東福寺の釜
- 仁毛人の墓并 來船人の歌曲
- 西念寺の古鐘并 藪子香の物
- 津嶋繁并 幸崎の狐松
- 筑麻葉の圖説并 正徳四年江戸根津葉札の番附
- 三上鏡村兩恋并 百足山の経
- 藪の下奴茶屋の權輿

卷之二

- 吉野の傳并 蟹の盃け圖説



- 烟苑書畫展覧の目錄
- 大永八年傾城局の券書
- 應舉の辨猪并那馬此銘
- 八文字至自笑の畧傳并其碩
- 了うきふれ解并せんぞ万歳の畧説

卷之三

- 俳諧師鬼貫の傳 同道引
- みの至三勝の古家并笠屋三勝の辨
- 院久の墓并瓢草の圖説
- 浪速五人男
- 近松門九馬の作文の自序

初編總目錄 畢

終日長程
 復經程一
 山行盡一
 山青跡傍
 君子莫相
 笑天上由
 來有客星



山行日記
 一

葛城山行記卷之二

尾花毛の
 顔姑峯の
 石橋馬蹄

獨立巍々白玉巒
 中天積雪夏猶寒
 五雲佳氣連金闕
 雄鎮扶桑萬歲安
 朝鮮張應斗



平眺望真不二



葛城山行記卷之二

石橋馬蹄

朝熊も共小朝隈の峯よりて字の借たるのむさしたの筑波
 としよも山は隈紫たたるそと墨ていふ説文云云十山
 曰阜曲阜曰阿云云阿ハ山ハ山ハ望望之
 阿をのくよふの鏡とよぶ一爾雅云凡山望望之
 則翠近之則漸微故云翠微は山色をのり
 遠近をのりてり翠も亦よふよふふあやど遠山を隈
 おのづから濃ものこそれれ日の出没さるるそ一きは鮮明
 又内なるものなれば朝隈といふあるべし亦筑紫の國ハ
 本綿田山なりあれも夕隈の峯よりて夕日は山の隈のけり死
 さらたより名づくるなるん朝と夕とりくらたるハ山形
 勢と日影の方角よふるべし。あさそひあさそひのそを界せこの山を隈
 ことあり天正十八年小田原陣の附細川幽齋富士のちよふんと

くあ書おゆく携あひ一が古人の名交よそあはし
 なるりとか也近時惟緒師芭蕉生涯富士の麓向なく
 丸山意足十富士を画ごといふをせ残ハ佳句の得たるを嘆
 一。意筆ハ富士を又ごをそとつて親くくのなるたと又ごご
 画せごごらうごそれ何れゆりも其よ及よ心を困るといふア
 ○駿馬の蹄迹并東福寺其墓
 松根根之枚橋の東五六町并溝ありてかこつる湯本村掃除
 下場の定杭ありこの溝は三尺をりれ石を五六枚ごごて橋と
 北より之枚めの石は各馬の蹄跡とよむのこれりそのうち
 初のごご相傳ふむり一曾我五郎時政駿馬を跨く山をんせ
 たりよ強倉より使れりて途よはるはあひぬ附政馬を石
 橋の半よごむるの馬蹄石よ入ると四五分今も月存きり

懐くこれを踏みのハカアラゴと崇あり。一人あり。伴の石を
さうて端の石とさう久たり。その人おろよ死と里人怖そ
く獲えのどくせり。肺氣を患るゆへに新にたらし
愈む。よりく常は橋のまゝは線香の焚きあり。これハ祈願而
る人船とよまらる。津とらふ又箱根権現一の多居の辺に
釜二ツあり。高三尺。文永五年。龜山院。造る所あり。東福寺浴室
の釜なり。別當法橋住隆實とあり。釜の縁は。く人の志ねると
ろなる。圖せど。赤湯本畑の民家。正月門に櫓をさるる。こ
本の釜ハ八尺のりたるを二ハ伐とりて。十二月廿八日。く
戸こととこれを建ると他例の門松とおお。櫓ハ元橋の種
類。あり。くめぐらしたるもの。今ハ仏家の香苑にさる。用
ることなれば。ちとさるもの。ハハ中。あり。

梅屋ガ舊跡并菩提寺の古墳

梅屋勤玄滂が家ハ駿府西智町北側中程にあり。此
あり。その迹なりといふ。賊首何ガ。この名案。ガ。の石ハ府
中寺田菩提寺の墓門右のまゝあり。石塔婆缺損し。ら
中程の石なり。又弥勒寺。府中より西。二十町あり。今ハ地名ハ
なり。土俗弥勒の十三佛とさる。是も彼も。菩提のさめ
は姉妹の尼ガ建立せしといふ。こも墳墓あり。尋常の石
碑のごとく。

紅毛人の墓并船人の歌曲

遠州掛河轉念寺本堂の前西のむまは紅毛人の墓あり。
高二尺をり。幅五尺は二尺四五寸もある。一ハ片洋形。ま
して長楹の蓋をさる。四角ハ石垣をさる。施を



大通解東の姓名を刻と暮結ハ阿蘭陀字ハ五六年
 紅毛人族中アル没とこれモ東海道ノモリテハ
 亦寛政十二年十二月十二日大清寧波府の船人劉然トホ其の
 徒八十六人遠州袖志ガ浦去桂川 三里并小漂志ト彼地ハ近田のウラ
 清人オガケル一曲子あり。掛河の人耳熟ト唱ヒ其名たり
 其の曲魚鼓の玉記と云ふなり
 西三章ウツソヤ録と唱ホケ方ハ潮來曲と云ふなり。

我的吓感郎的呀有呀吓呀有
 看吓奴個九連環九吓九連環雙手
 拿來解不開奴把刀兒割ト不斷了呀
 呀有ト
 我的ハこれハ助字ナリ吓ハ驚キ感ハケルヤト云フ
 テ郎ハオホキト云フノ男ノコトヨク云フヲハオホキト云フ
 ト云フコトハ男ノコト云フヲ云フノコトハオホキト云フヲ云フ
 ト云フコトハ男ノコト云フヲ云フノコトハオホキト云フヲ云フ

誰人吓解奴的九連環九吓九連環奴
 就與他做夫妻他們是個男ト子僕了
 呀有ト
 前章のその二章ナリこれハ死得バハト云フ
 也アホキト云フコトハ男ノコト云フヲ云フノコトハオホキト云フヲ云フ
 ト云フコトハ男ノコト云フヲ云フノコトハオホキト云フヲ云フ

哥ト吓住城の妹住船妹吓妹住船雖
 然與你隔不遠開不城門難ト得見了
 呀有ト
 哥ハオホキト云フコトハ男ノコト云フヲ云フノコトハオホキト云フヲ云フ
 ト云フコトハ男ノコト云フヲ云フノコトハオホキト云フヲ云フ

變ト吓鳥的飛上天飛吓遞上天哄
 呱嚙滾了來還有一個重ト相會不呀
 呀有ト
 前章の二章ナリ城門ノウチニオホキト云フコトハ男ノコト云フヲ云フノコトハオホキト云フヲ云フ
 ト云フコトハ男ノコト云フヲ云フノコトハオホキト云フヲ云フ

拭河下樓町の大湯氏より。哪咳劉然乙の書る扇面を撰りて
 呈す。本朝人の書画奇と云ふ不異しねど。らるる小書りて其書也。

渡魚歳晚渡
 江津
 笋飯尊羨又
 換春
 棄印可望天

上家
 射書元屬海
 東人列坐也

印泯滅不可復焉

○西念寺の古鐘并 藪小香代物
 六月中旬尾陽よあそびぐ。一日鳳凰山甚同寺小精 名古屋より
 土俗ハおろくーといひて 本尊正親世音ハ推古天皇即位四年丁巳甚
 村の名おむらふを利
 同龍磨宮とりよその網して海底より引上るるより。至同寺
 と号するより縁起よ見えたり。まられば千百余年の靈場

なる。この寺は江州西念寺の鐘あり尋常の鐘よりちひ
き。建武二年依木依渡入道及基が芳進之の銘云。

江州西念寺鐘

晨鐘響遠振十方界
夕梵聲廣度三有際
三寶久住四生俱利
天下泰平海内安全

建武二年三月二日

大工藤原の安
大檀那道譽
住持比丘令海

外子文雨正と下方の續と蓋依木氏鼻祖宇多天皇の
所子敦員親王の末孫兵庫頭成頼をめぐりて屬の長と
す。江州依木の城は居住し依木氏と稱す。世人宇多天皇の
御孫と云ふ。

入乃道差の成頼より五代孫三秀義六世の孫あり。平途
を平記よりえり。西念寺舊趾の考をめぐりては織
田の兵礼小山門の末寺回祿せり。或は淺井滅亡の時た
こたこの鐘をめぐりて来りてその銘を免

この日阿波島の森敷小香の物アヤヨヨあり。八町斗東にこの辺川
あり橋あり。まぶらのさる大和路は宵たさる多燈のそと
華表あり。このうちさるから阿波島の東なる華表を潜
せ町さるさるが茶面小最祠あり。祠のまへは平記神
楽堂あり。この右のかよ大竹數十竿茂出り。敷のうらふ五
斗さるも入るべし桶あり。桶のまへも小祠あり。桶蓋
く大なる石をのせり。蓋も破れくさる。何れもあはれくさる
備はれさる。香の物頂戴の人と寺へまはる。と記たり

二
 一
 一



年産の
 七道
 ち
 まあ
 日本一
 ろの
 ろ
 ろ

この馬蓋中小鼻つゝとのとらう。その両眼を又をたぐり、
 あれは自らも小あつとどろ何ぞや。果あつとこの説を感ど梓
 この二藤何人ぞ。野夫あも切あつとふたれををやらへん。

○八文字舎自笑の傳并其碩

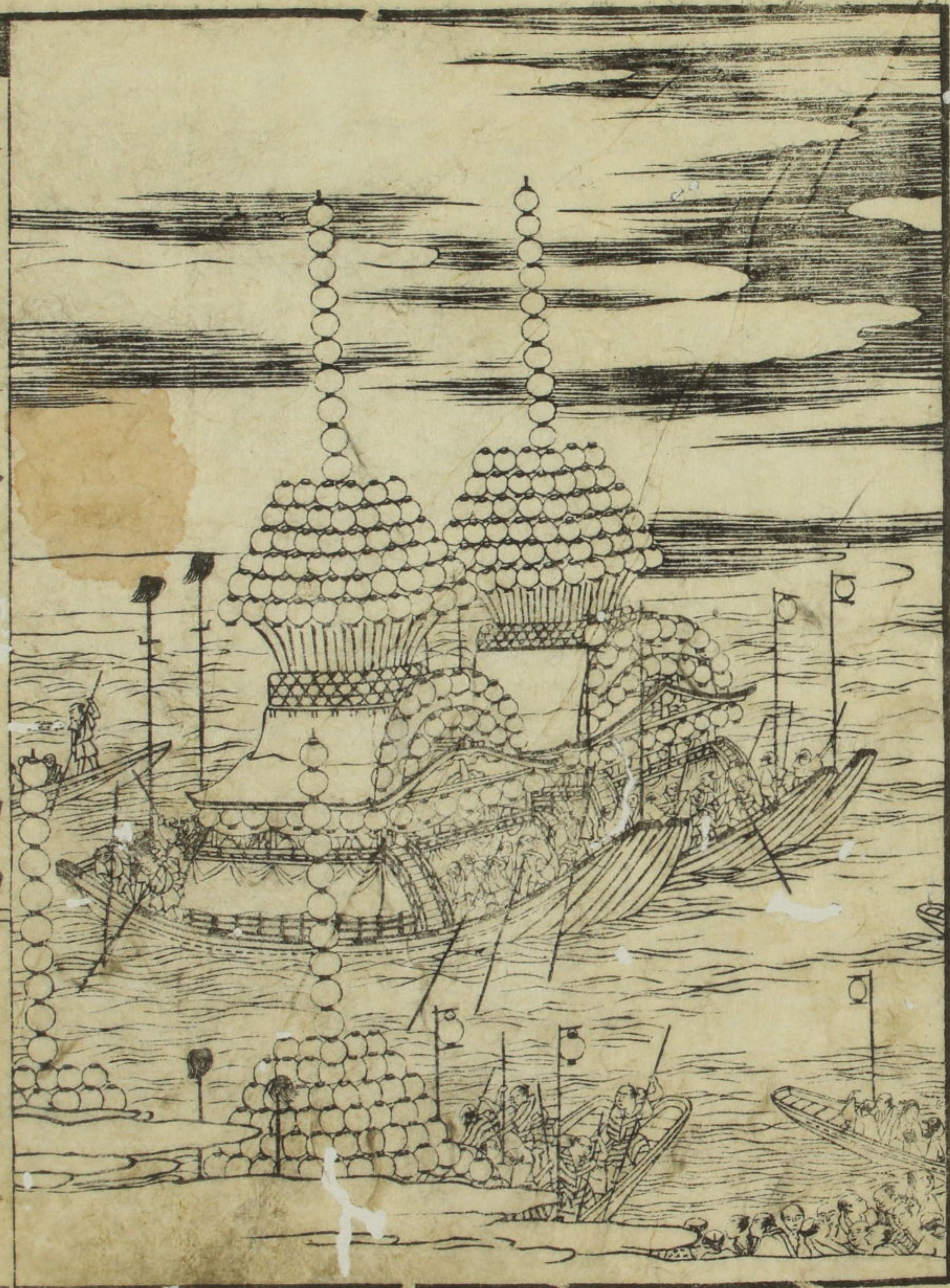
自笑の京教数屋町の書肆。八文字を八九とつゝと世の人
 而手祿くあつととらうなり。今の八九とつゝとありて照小四代近若
 京を去りて大坂安堂寺町に居と。平客中々の家を坊
 々。自笑の傳を向とも詳たつと自笑姓ハ安堂氏延享
 二年十一月十一日没と。年八十條。京二條寺町本覺寺小菩提
 あり。この外少傳つゝとつゝと。自笑の墨迹もたつとれ
 火難よりせり今ハたりといふ浪速の友之鬼橋庵ハるや
 京れ人あり。彼人の銘。其碩ハハ傳を市糸をとらう。六八

二
 一
 一

新編 浮城

長江兩洲卷之二

刀扁

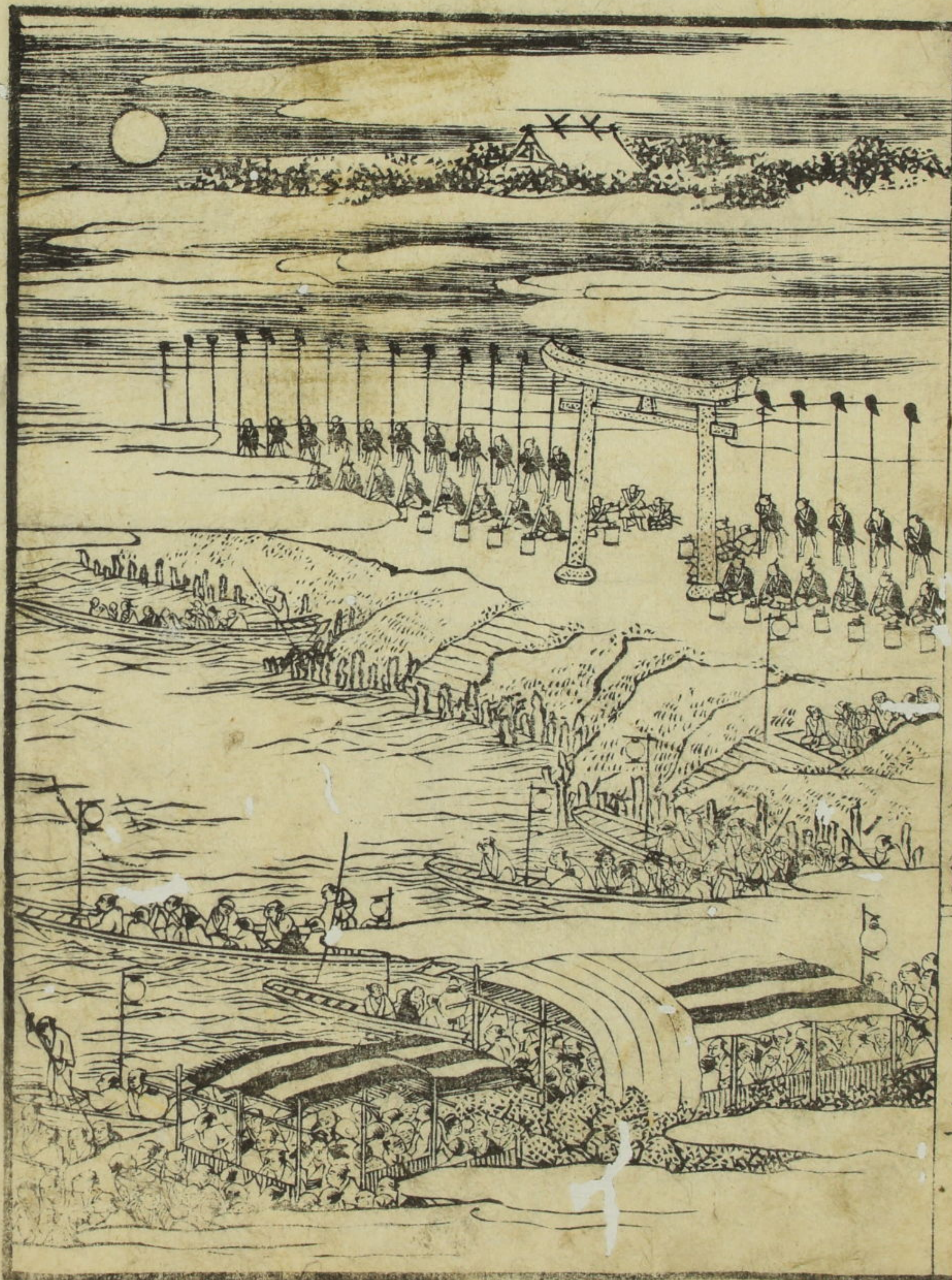


新編 浮城

長江兩洲卷之二

社

十五



おろくあるとのい宿なく。暮下り不くあそび人もありとぞ。そん
 十四日今夜國の正元船五艘各船出さるるの多居堤の正の船小
 船亦次舟子船中管二百六十個の挑灯ハ一年の日の数子
 象子生担の挑灯十二個ハ月の数なり。欄四方の挑灯三十個ハ
 一月の月数を表と。船一艘ハ挑灯とぞ。四百余張のつれも死
 竿まつ死はけて。次舟すくこれを張この処岐岨川の末ありて
 その巾敷町より及ぶ。大川は大河をうくる。二千余個の挑灯
 を約とすれば。その船水は映く星の如し。糸指の船ハ左右の
 堤ハ枝波をうけ。或ハ糸船してこれをえり。のり合ハ五十人
 も堅固の衣士を穿し。あひさいと嚴重なり。元この河は橋あり
 ち致云。雲ハ橋の上あり。出水後橋を以。なる辰の丸右に列に
 十五日の朝糸ハ。市販車を先と。津橋の車馬山車。その前後

橋下して五村次舟を論せど。五村ハ米生。塘下。茂場。今市場
 下構。是く体の五艘。錦繡の幔幕。綾羅の水引。ホは装之。欄干。虫
 錦の陣羽折と。この陣羽折ハ大岡考吉云いそぎなく。柱馬。了。は金
 錦の五米旭。映りて。目さし。り。と。屋敷の上。ふ。り。此人形。と。屋
 山車。船中。虫管。経あり。船名。展。幕。この一。も。居。り。あり。本社ハ八町あり。是。と。衣。對
 ち。る。見。二。人。り。船。り。あり。て。社。一。指。又。別。は。布。の。水。引。と。山。車。船。は。艘
 後。より。體。あり。て。山。車。の上。より。鉄。炮。を。ら。ん。と。これ。を。合。圖。は。船。中
 ち。り。燈。を。四。五。相。つ。と。あ。ら。や。る。是。放。生。會。の。あ。ら。な。り。一。これ。あ。り。糸
 糸。を。と。り。朝。五。の。半。と。り。の。あ。あ。あ。と。り。の。を。賣。さ。これ。ハ。餅。を。種。の。實。は
 大。サ。あ。り。て。胡。十。の。油。あ。り。揚。た。る。と。の。く。の。餅。を。と。り。れ。ハ。あ。ら。い。と。の。あ
 秋。これ。を。と。り。と。香。一。又。船。の。う。画。だ。る。團。扇。を。も。賣。さ。之。余。ハ。津。橋
 は。あ。り。あ。り。て。旗。店。も。他。人。を。と。り。と。と。あ。あ。も。枝。波。あ。り。足。物。せ。り。の。り

水鏡... 記世記
 一
 一

新井



美濃

刀

新井



貞享四年正月廿五日

深江屋右衛門長清坂山崎屋市兵衛行

新井

刀

一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十



一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
一 九 二 三 七 四 九 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十



古老云國初のころ 粟田口は城出で、
 了。教の下は衣夾あり浪人し、茶店を
 とも。夜を犯し、系一西人とさる人、
 の主人を備主人と号し、弓箭を携へ、
 ちとあつね、今も店より弓箭を
 とひ、あつね、東海道の逢場系を
 ふこの茶店の主人の片岡と云、
 一銃

蓑笠雨談初編卷之一

蓑笠雨談初編卷之一
 此の茶店の主人の片岡と云、
 一銃



